



【5】春田鉄次郎邸…共存の試み

1 建築家・武田五一

明治から大正・昭和初期と活躍した建築家に、武田五一がいます。京都が中心でしたが、東京や大阪等全国に多くの作品を残しました(図1)。今日でもファンクラブのある建築家で、国会議事堂の設計にも関与しています。

この武田五一が、大正7年、名古屋高等工業学校(現：名工大)の校長に就任しました。同校は、当時東大に次ぐ建築学の教育機関でした。2年後に京都帝大の建築科創設のため

に転任しますが、名古屋の建築や都市にも影響を与えた人です。

東区の主税町にある春田鉄次郎邸は、氏の設計で、大正14年に完成しました。また、先年までその隣にあった「春田文化集合住宅」も昭和3年の建築です。これは集合住宅のモデルとして建築学の教科書にも載る作品でした。

今回は、この武田五一が設計した春田鉄次郎邸を中心に、その保存への経緯を見てみたいと思います。

2 春田鉄次郎邸

(1) 武田五一と名古屋

武田五一は、明治5年、広島県福山の出身で、帝国大学(現：東大)造家学科卒。大学院中退で、名前が変わった母校の東京大学建築学科の助教授に就任しました。欧州視察後の36年には京都工芸大学(現：京都工繊大)図案科教授に就任し、京都に移っています。

そして大正7年、名古屋高等工業の校長として赴任したのです。その頃の建築学科の科長は東大で先輩の鈴木楨二だったため、あまり影響力を発揮できなかったようですが、そ

分野	作品例(時期・場所)
役所	山口県庁及び県会議事堂(T5・山口)
大学	京都大学本館(T14・京都)
企業	日本勧業銀行<補佐>(M32東京)
住宅	芝川邸(M45・兵庫)
寺院	播州清水寺根本中堂等(T6・兵庫)
駅舎	地下鉄心斎橋駅(S8・大阪)
橋梁	二条橋(T2・京都)
公園	円山公園(M45・京都)
博覧会	御大典記念京都博(T5・京都)
修復	鹿苑寺金閣・平等院(M37・京都)
像台座	伊藤博文銅像台座(M44・兵庫)

出典：INAX REPORT NO.169 他

図1 武田五一の作品例。比較的初期のものから

れでも、「洋風」が中心の鈴木に対して、「和風」の、数寄屋建築を評価したのが武田だったので。このため、作品には近代建築とは言いつつも和風のものが目立ちます。名古屋にかわりのある作品の中には次のようなものがあります。

- ・高松定一郎：大正2年。氏が専門の茶室設計で関与。近年、犬山市に移築
- ・春田鉄次郎邸：大正14年。個人住宅(後述)
- ・春田文化集合住宅：昭和3年(2期：7年)。住宅13戸+事務所1の集合住宅(後述)
- ・藤山雷太郎：昭和3年。東京白金台に建築した邸宅。その日本家屋を戦後、名古屋(昭和区荒畑・竜興寺)に移築

(2)春田鉄次郎邸

春田鉄次郎は、前回紹介した井元為三郎と同じく陶磁器の輸出業者として大を成した人です。大洋商工という会社を興し、主にアメリカへの輸出を行い、その魁になりました。一方、氏は乗馬好きで自宅に厩舎をつくるほどの趣味人だったようです。そして武田五一

とも交流があり、自宅の設計を依頼したのでしょう。

春田鉄次郎邸は、大正14年に完成しました。全体としては和風の印象がありますが、アールヌーボー調の洋館を前面に、後ろに接して和館が配置されています。

敷地は、400坪程と白壁地区の他の土地より小さくなっていますが、約200坪は西側の文化集合住宅に使われており、集合住宅はそれをプラスして計画されています。

その文化集合住宅は、本宅から少し遅れた昭和3年に1期が完成しており、氏が経営する大洋商工の事務所(明治期の完成とされる)と、13軒の賃貸住宅が一体となった和洋折衷の集合住宅です。そこでは敷地の周囲に戸建と長屋の建物が並び、真ん中に共通の広場があるという斬新なものでした(図2)。

(3)保存の経緯

春田邸の保存が動き出したのは、隣接する豊田佐助邸等の保存問題で周辺の調査をしていた段階です。武田五一設計という貴重な住

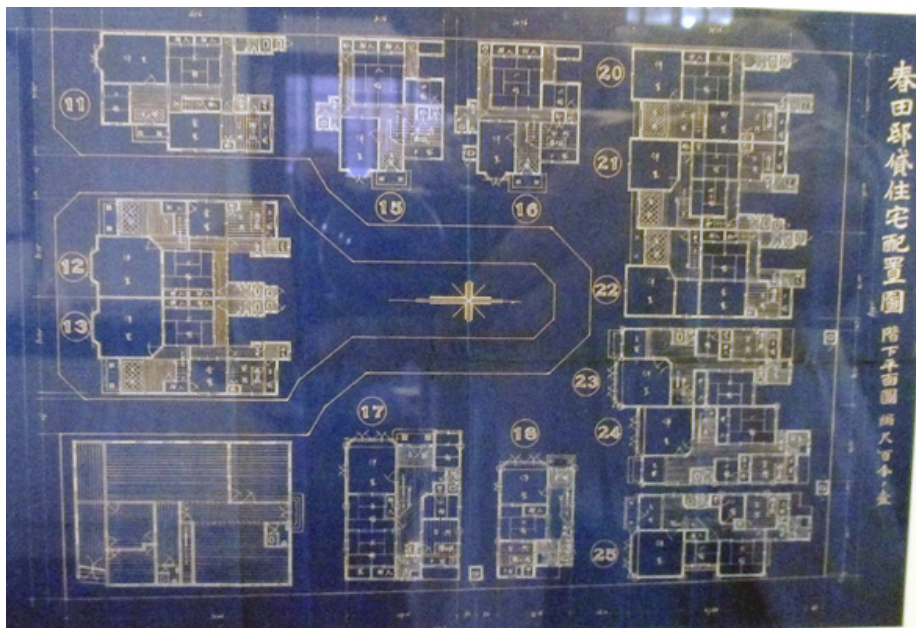


図2 春田文化集合住宅の設計図(階下の平面図：春田邸掲示より)

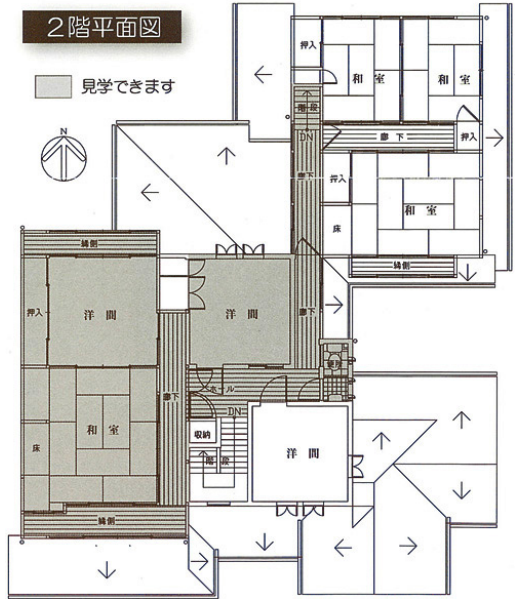
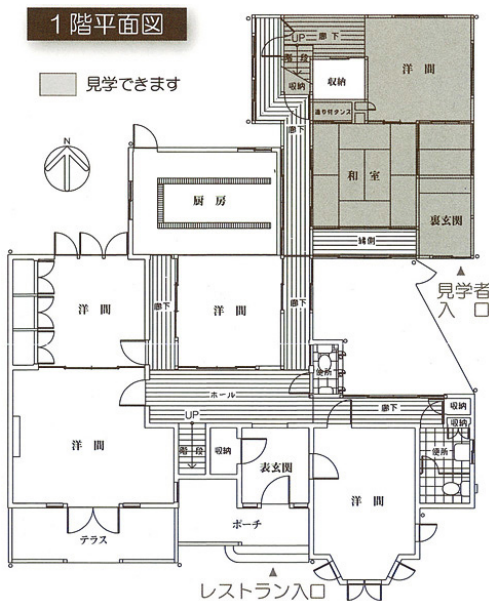


図3 春田鉄次郎邸の現況。網掛け部分が公開箇所：春田邸案内より

宅ですが、将来的には保存が困難になる可能性があるということで対策を考え始めました。

一般的に云えば、居住者のいる住宅の保存は居住継続が原則です。ところが保存しようとする生活が犠牲になります。そこで、それを長期的に回避するために、居住者が転居し旧宅を売却または賃貸するという方法が考えられたのです。春田家は現地に居住継続を希望されたため、庭園部分に新居を建築し、古い建築物を賃貸して新築の資金を確保するという方法がとられました。

賃貸先には、様々な方法が考えられましたが、当時は高級レストランが古民家に店舗を移しつつあった時代でした。そこで入居者をさがし、現在の店に決定したのです。ただ、和館部分は利用できないことやご家族の希望もあり、まず一括して公的主体が一括借用しました。そして洋館部分等をレストランに転貸、その他は貸室とし、空いた部屋は一般に公開することになったのです。

この建物の保存も試行錯誤になりましたが、近代建築の大御所・武田五一の作品が、ほぼ

原形のまま、現地に残すことができたのは幸運でした(図3)。

3 紀行 大洋商工ビルから春田邸

… 著名建築家設計の家 …

まず、残存する春田鉄次郎が興した大洋商工ビルを見て、それから白壁地区の春田邸に向うことにします。

〈大洋商工ビル〉

地下鉄桜通線の車道駅の1番出口を出て、



布池町にある大洋商工ビル。
落ち着いたたたずまいを見せている



大洋商工ビルの入口

西に向かいます。しばらく行くと布池の交差点です。昔、路面電車が交差していました。その手前二つ目、右側の落ち着いた5階建てのビルが、春田鉄次郎が興した大洋商工のビルです。それ以前の事務所はこれから訪れる春田邸の隣にありました。昭和7年、新たにこの新社屋が建設されたのです。

その東に隣接するビルも陶磁器業界のビル(陶磁器センター)ですが、旧館は9年に建設されたもので、現在は新館の後ろに隠れています。この辺りも、陶磁器業界の拠点だったことが分かります。

大洋商工ビルは、現在は、貸しビルになっていますが、現代にすっかり消えてしまった近代建築の香りがするビルです。

〈春田鉄次郎邸〉

大洋ビルを出て西に進みます。国道19号を渡り、ずっと進むと、今度は41号です。地下には地下鉄高岳駅があります。そこを北



春田邸の前の通り。

文化集合住宅は和洋折衷の結婚式場になった

に曲がり、幹線道路の外堀町線を渡り、次の主税町の信号を右に曲がります。その先の左側、新しい和洋折衷の結婚式場の向こうが旧春田鉄次郎邸です。

春田邸の周りは大きく変わりました。西側の文化集合住宅と旧大洋商工の事務所は、先ほど見た結婚式場に。春田邸にも新築があって、昔のままに残った門が小さく感じます。中に入ると魅力的な通路があります。その先には、洋風の建物が見え、手前で道は左右に分かれています。左側が主で、洋館への通路です。洋館の玄関横には、茶道の待合のような空間があります。茶室が専門の武田五一ならではの設計でしょうか。

玄関から中は、今は仏料理の高級レストランになっていて非公開です。食事を兼ねて見学します。靴を脱ぎ、突き当りを左に進むと、主の洋室です。庭に面し、暖炉の空間があります。壁にはガス灯も目につきます。北側の



春田邸の建物への通路。洋館の後に和館が見える



洋館の玄関。左側に「待合？」の空間がある



主の洋室。暖炉の空間が見える



張り出した洋室。窓が多く明るい



二階にある和室。床の間のある部屋

部屋は仏間のようなのですが、ここも洋式です。部屋を出てバックし、玄関前を通り過ぎた右側にも洋室があります。先ほど外の通路から見た部屋です。窓が多く、明るい部屋です。

レストランを出て、先ほどのY字の分岐点を反対側に進むと和館の入口があります。ほっとするような玄関です。ここは公開施設です。中に入ると、和室、洋室があり奥に2階への階段があります。上ると、一番奥の部

屋(洋館からも通じている)がこの建物の和室の主室のようです。2階も和・洋室が混合していました。

春田邸は和と洋が混じり合っていますが、それを感じさせない落ち着いた雰囲気がありました。門を出て、来た道を歩くと高岳駅に戻ります。

4 保存の意思

古い建物を保存するためには、一般に、①現在の利用にどう対応するか。そして、②その後をどう利用していくか、が問題になります。これまで見てきた豊田佐助邸(第3回)、井元為三郎邸(第4回)では、現居住者がなかったため、①は問題になりませんでした。ところがここ春田邸では居住者がいました。そこで、まずその居住者と保存をどう両立させるかの解決が必要でした。それは初の体験でしたが、所有者のご理解があつて、無事解決できました。

しかし①、②の前に、もっと重要な問題があります。それは、「保存の意思」です。ここ春田邸には、所有者に、保存するという意思がありました。考えれば、もっと経済的に有効な利用法があったかもしれません。が、そこで保存するという選択ができたのです。

一方、残念だったのはお隣の文化集合住宅でした。相続の関係からか所有者が違い、こちらは除却されて、現代的な利用に変わりました。近代建築、そして文化財の保存にも、最も大切なものは、所有者の、「不経済でも保存する」という意思ではないでしょうか。春田邸は、本宅と集合住宅で、その明暗を分けることになりました。

〈主な参考文献〉

- ①『名古屋陶業の百年』(1987、名古屋陶磁器会館)
- ②石田潤一郎『武田五一』(INAX REPORT 169)